

踏み込んではいけない領域へ

—— 林京子「空罐」論 ——

鈴木 章 弘 (国 語 科)

I 踏み込んではいけない領域

被爆者でもない自分が、原爆のことを語ってもいいのだろうか。

これは原爆に取り組む多くの作家たちが、繰り返し述べてきたことだ。『夕風の街 桜の国』で、被爆者の終わらない戦争を描いたこの史代は、その「あとがき」の中で、次のように語っている。

わたしは広島市に生まれ育ちはしたけれど、被爆者でも被爆二世でもありません。被爆体験を語ってくれる親戚もありません。原爆はわたしにとって、遠い過去の悲劇で、同時に「よその家の事情」でもありました。怖いという事だけを知っていればいい昔話で、何より踏み込んではいけない領域であるはずと思っていた¹。

¹ この史代『夕風の街 桜の国』（双葉社 二〇〇四年 一〇二頁）

原爆は「踏み込んではいけない領域」であるという意識、それは『父と暮らせば』²で、広島原爆とその記憶の問題を描いた井上ひさしも例外ではなかった。

井上は、「原爆文学」についての座談会の中で「これほど悲惨な悲劇を体験しない人間が（原爆のことを 引用者注）軽々に書いてはいけない」と思っていたという³。これらの発言は、当事者ではない者が当事者のように語ってはならない、当事者の言葉を他人が簞箒してはならないという、倫理観のあらわれであるにとりあえずは言うことができるだろう。それは何も原爆に限った話ではない。東日本大震災の折もそうであつたことを、私たちは思い出すことができるはずだ。

では翻って、被爆者自身による原爆文学はどうであつたか。

ここで取り上げる林京子は、一九四五年八月九日、爆心地から一・四キロメートルの三菱兵器製作所大橋工場で被爆している。長崎県立長崎高等女学校三年、十四歳の時であつた。原爆について長い間何も語れなかつた林であつたが、一九六二年、同人誌『文芸首都』に参加、さらに一九七五年、自らの被爆体験を描いた「祭りの場」で群像新文学賞、ならびに芥川賞を受賞、以後、本格的な著述生活へと入っていくことになる⁴。

誤解を恐れずにあえて言うのなら、林の被爆経歴は、作家にとって特権的な聖痕としてもみなされるものであつた。

² 一九九四年九月、こまつ座にて初演。

³ 井上ひさし、小森陽一編『座談会 昭和文学史』五（集英社 二〇〇四年 二五頁）

⁴ 渡邊澄子、スリアーノ・マヌエラ『日本の作家 100人 人と文学 林京子』（勉誠出版 二〇〇九年 三〇二・三〇三頁）

原爆という想像を絶する経験は、余人にとってまさに「踏み込んではいけない領域」であり、それを描けるのはその当事者のみ。そのような倫理観めいたものが「原爆作家」としての地位を林に与えることになる。

『文芸首都』の同人であつた中上健次は、原爆を描く林に対し、「林さん、泣き言はよせよ」、「痛い、痛い泣き言だ」と語り⁵、さらには林を、原爆という体験の特権化する「原爆ファシスト」であるとさえ言った⁶。

しかし林京子は、はたしてそのような特権性の上に立つて小説を書いていったのだろうか。そうでないことは、林の次のような発言からも明らかであろう。

「原爆作家」と言われた時には、「私は小説を書いているつもりです」と答えてきました。「原爆文学」「原爆作家」と一括りで枠にはめられることが、ずっと私は嫌だったんですね⁷。

林にとって、被爆者であり、原爆の当事者であることは避けようもない事実であるが、その事実を、表現者の特権として行使する否かは、おのずから別問題である。そして特権として行使するにしても、それがすなわち、中上の言う「原爆ファシスト」にそのままつながるというわけでもない。

⁵ 井上、小森前掲書 五七頁 林京子の発言より

⁶ 柄谷行人・中上健次・川村二郎『第七十四回 創作会評』（『群像』一九八二年二月 二八八頁）における中上の発言。林の「無事」という小説について「林さんの体質である、文学の場における原爆ファシストとしての性格を、まさにありありと出したものだと思う」と発言し、「同人誌にいたときも、一度として林さんの小説を小説として認めたことがなかった」と述べている。

⁷ 林京子（聞き手 島村輝）『被爆を生きて 作品と生涯を語る』（岩波ブックレット 二〇一年）

だが、当事者の特権に無自覚であり、その特権性にだけ依存してしまった場合、当事者とそうでないものとの間に断絶が生じてしまうことは明らかであろう。そしてこの断絶は、非被爆者を原爆の問題から遠ざけ、いつしか原爆は静かに忘れ去られていくことになるだろう。

林が当事者の特権性について自覚的であったことは、先の発言からも読み取れるが、しかし林の小説群が、その自覚をどのように生かしているのか、それを読み解くことこそが重要であるはずだ。

ここでは、芥川賞受賞後の一九七三年から翌年二月にかけて『群像』に発表され、のち『キヤマン ビードロ』（講談社 一九七八年）としてまとめられることになる十二の連作短編のうち、最初の一編「空罐」を取り上げ、当事者性とそれを保証する記憶の問題について考えていくことにしたい。

II 微妙な差異

「空罐」は、卒業後三十年経った五人の同窓生が、「来年一杯で廃校になってしまう」母校「N高女」（長崎県立長崎高等女学校）を訪れるというところから書き起こされている。この五人とは、林京子本人と思しき、「離婚」を経験した焦点人物の「私」と、中学校教師で独身の太木、「被爆以後、悪性貧血に悩まされて」結婚できずに両親と同居している原、そして「五人いる、かつての少女たちの中で」ただ一人「平穏な結婚生活を続けている」主婦の野田、さらに半年前に夫を亡くした服飾デザイナーの西田のことである。太木、原、野田は「N高女」の「はえぬき」であり、「私」と「西田」は転入生、さらにこの五人のうち西田だけは、被爆を経験していない。西田がN高女に転校してきたのは、「終戦の年の十月、追悼式の日」であったからだ。それ以外の四人は全員被爆している。

かつての同窓生たちは、当初、昔の教師の物真似をしながら、たわいもない会話をしていたのだが、「講堂の入口に立った瞬間、私たち五人は雑談を止めた」。その講堂は、「終戦の年の十月に行われた、原爆で死亡した生徒や先生たちの、追悼会」が開かれた場所であったのだ。

講堂は、明るく、ひっそりしていた。悲しゅうなる、と原がつぶやいた。追悼会——と私もつぶやいた。大木と野田が、無言でうなずいた。幕をはぎとられて裸になってしまっている舞台に向かって、私は黙禱した。

ここで注意すべきは、深津謙一郎が指摘するように、この講堂の中にみなと一緒にいるはずの西田についての描写がない点だ⁸。その理由は、その後の西田自身の言葉によって明らかになる。西田は「原爆の話になると、弱いよ」と言う。さらに「あなたたち四人は、講堂の入口に立った瞬間、泣き出しそうな顔をした。あの時、あなたたちが考えたことは、追悼会のことでしょう。わたしは、そうじゃないもの」と語る。西田が「弱い」と言うのは、「心情的」に被爆した四人に寄り添いたいと思つても、「被爆したか、しないかの差」が、そのまま人間関係の「結びつき方」の強弱にまでかかわってしまう、ということなのである。ここで西田は、被爆した四人の「結びつき」の外にいたのであり、だからこそ彼女についての描写はないのである。

⁸ 深津謙一郎『『八月九日』の亡霊 林京子『ギヤマン ビードロ』論』（『共立女子大学文芸学部紀要』第五七集所収 二〇一一年 七四頁）

「原爆の話になると、弱いよ」という西田のつぶやきは、被爆者と非被爆者、当事者と非当事者の間にある断絶、つまり「踏み込んではいけない」領域に触れてしまった者の言葉である。ここにおいて、被爆者と非被爆者との間にある太い分割線が明確に示されるのだ。

このことは、語りにおける当事者の特権性ともかかわってくるだろうし、さらには、被爆者であることを強調するというのは、さまざまな人々のさまざまな被爆の経験を「一括りで枠にはめ」てしまうことにもつながってくるはずである。なぜなら分割線を引くということは、こちら側、あるいはあちら側の内部に当然あるはずの差異を消すことによつて、こちら側とあちら側との違いを明確にするということでもあるからだ。当事者である被爆者は、「被爆者である」ということで一色に塗りつぶされ、その差異が消去されてしまい、それこそが中上の言う「原爆ファシスト」の語りを生み出すことにもなっていくのである。

だが「空罐」は、被爆者と非被爆者との間に分割線があることを示しつつも、その描写は被爆者たちの差異を消去する方向へと動くことはない。川西政明が指摘するように、この「空罐」は、登場人物の「微妙な差異」が「簡潔な描写の中に納まっている」小説であり、さらに「被爆という一点についても」被爆者全員が「同じ経験をしてはいない」ところにこそ特徴がある⁹。この小説は被爆者たちの間に、さまざまな形で差異の分割線を走らせる。

過去においては「N高女」の「はえぬき」であるか否か、現在においては職業の有無と職種、既婚／未婚／離婚といった生活のありようまで、母校を訪問する被爆者四人の境涯はそれぞれに書き分けられており、この四人が「被爆者」と

⁹ 川西政明「林京子小論」（林京子『祭りの場・ギヤマン ビートロ』講談社文芸文庫 一九八八年所収 三七五頁）

いう色一色で塗りつぶされ、「一括りで粹にはめ」で語られることは決してない。このように「空罐」という小説は「原爆ファシスト」の語りに傾くことを極力回避しようとしているのである。

Ⅲ 被爆者と非被爆者の「心の負担」

こうして非被爆者である西田を含む同窓生五人の境涯がそれぞれ簡潔に語られたのち、次に焦点を当てられるのが、ここにはないきぬ子のことである。きぬ子は島原で小学校の教師をしているのだが、被爆した際に体内に突き刺さったガラス片を取り出すため、「原爆病院」に入院することになり、今回の母校訪問に参加できなくなってしまったのだ。きぬ子は被爆の際、「私たちの恩師」であるＴ先生の即死の瞬間を見ている。

その時Ｔ先生は、きぬ子に向かつて、大きな口をあけて何事かを叫んだ。言葉は、勿論聞き取れなかった。単なる叫び、だったかもしれないが、きぬ子はＴ先生の最後の言葉を、何とか理解してあげたい、と思い続けた。開いた唇の形を脳裏に繰り返し描いて考えているうちに、いつの間にか、Ｔ先生はきぬ子の頭の中に貼り絵のように、貼りついてしまった。

そしてＴ先生の最後の言葉を理解できなかったことが「きぬ子の心の負担」となつて、三十年もの長きにわたりきぬ子を縛り付けるようになっていく。二人の立っている場所の「微妙な差異」が、Ｔ先生に死を、きぬ子には消えることのない「負担」を与え、二人を分かつたのだった。

ここで注意すべきは、きぬ子がT先生の死を死ぬことができない、T先生の死の当事者にはなれない、ということが提示されているという点である。このシークエンスは、被爆者ではない西田が、被爆者である同級生たちに「原爆の話になると、弱いよ」と語ることに照らし合わせたとき、その重要性が明らかになってくる。それはつまり、誰もが他者の人生の当事者になることはできない、ということであり、そこに被曝の有無は関係しないということである。「原爆の話になると、弱い」のは、西田だけではない。きぬ子も同様に、T先生の最後の言葉を理解できなかったことを「心の負担」として抱え込んだまま、生きているのである。きぬ子もまた西田と同じく「踏み込めない領域に触れているのだ。この点において被爆者とそうでない西田とは同じ地平に立っているものであり、この小説における被爆者と非被爆者との間の分割線は、無化されていくことになるのである¹⁰。

IV 無化される分割線

しかしこのように被爆者と非被爆者との間の分割線を無化したところで、結局のところ、当事者／非当事者という分割線自体は、かえって強固になるのではないか、という批判が起こるであろうことは十分に考えられる。

つまり、きぬ子や西田の、非当事者であるということの弱さ、「心の負担」に焦点を当てるといことは、当事者の絶

¹⁰ 深津も前掲論文の中で、デリダの〈亡霊〉という概念を援用しつつ、西田の感じる「ぎこちなさ」が「被爆の体験／非体験の境界線を流動化させている」（七五頁）と論じている。

対的な経験を前にした非当事者が、当事者の領域に「踏み込んではいけない」という禁忌を、ただ再確認しているだけなのではないのか、そういった批判である。

だが、この小説はその当事者の優位性を奪っていく。本来ならば、物語る際の優位性は、その当事者の記憶が保証するはずであるのだが、しかし「空罐」はその記憶の揺れについて語っていくのである。

Ｔ先生の記憶について、きぬ子は「私」に次のように話す。

聞きとれなかった言葉は、きぬ子の心の負担となつて、この頃では、あの情景が事実だったのか、Ｔ先生は本当に死んだのだろうか、と、それさえも疑うようになっているのだ、と言った。

Ｔ先生についてのきぬ子の記憶、それはまさに不確実で曖昧なものとして、彼女を苦しめていく。これは岡真理の言う「暴力的な出来事の、それについては語ることができないという点にこそ、その出来事の暴力性の核心が存在するよ
うな、そのような〈出来事〉」¹¹であると言えるのだが、それと同時に、このきぬ子の言葉は、当事者の語りを保証すべ
き記憶を根底から揺さぶるものになっているのである。

¹¹ 岡真理『記憶／物語』（岩波書店 二〇〇〇年 一〇頁）

この記憶の揺らぎに焦点を当てた時、この「空罐」において、一見、原爆とはかかわりのない、教室と同級生をめぐるシークエンスの重要性が見えてくることになる。

講堂を出た同窓生五人は、かつて自分たちが使っていた教室へと歩みを進める。しかし西田と「私」とでは、自分の教室がどこであったのかという記憶に食い違いがあり、さらに「私」は、今までずっときぬ子とは同じクラスになったことがないと思い込んでいたが、そうではなかったことに、同窓生の言葉によって気付く¹²。自分のことなのに、覚えていない、把握していない。この記憶のあいまいさ。そしてそれにつながる、当事者の語りにおける特権性のゆらぎ。これこそが「空罐」という小説の根幹にあるものなのであり、自らの経験のみを絶対化する語りを拒絶していくことになるのである。ここに至って中上の言う「原爆ファシスト」という言葉が、「空罐」という小説においては成り立たないことが明らかになるだろう。

この記憶のあいまいさは、当事者自身によって補正されることはない。それは不可能だ。だからこそきぬ子は、「丁先生の死に決着をつけるため」、「丁先生を焼きなつた」という「住職婦人の言葉」を「私」に確認しようとするのだし、同窓生の言葉によって、「私」はきぬ子が自分と同じクラスにいたことを改めて知るのである。

¹² このシークエンスは、「空罐」という、文庫本にして一八頁ほどの短編小説の中で二ページほどの分量を占め、決して無視できるようなものではない。

この過程で「私」は、「心の痛みになつて残っていた」ある出来事を思い出す。教室に毎日空罐を持ってきていた少女のことである。

その空罐の中身が何であるか、みんな知らなかった。しかしある日、「若い書道の教師」が机の上に置かれている空罐に気付いてしまう。

「その罐は何んだ、机の中にしまえ」と教壇から教師が言った。少女はうつむいて、空罐をモンペのひざに抱いた。そして、泣き出した。教師が理由を聞いた。

「とうさんと、かあさんの骨です」と少女が答えた。書道の教師は、少女の手から、空罐を取った。それを教壇の机の中央に置いた。ご両親の冥福をお祈りして、黙禱を捧げよう、と教師は目を閉じた。ながい沈黙の後で、教師は、空罐を少女の机に返して、「明日からは、家に置いてきなさい、ご両親は、君の帰りを家で待つて下さるよ。その方がいい」と言った。

注意しなくてはならないのが、「私」がこのシークエンスにおいて、単に記憶を思い出しただけではない、ということである。ここでもやはり他者によつて「私」の記憶は再編されているのだ。実は「私」の「心の痛みになつて残っていた」この少女が、実は他ならぬきぬ子であつたことに、「私」は大木の言葉によつて気付くのである。

「覚えとる？」と大木が聞いた。きぬ子の空罐？ と重ねて聞く。空罐を、どうかしなつたと、野田が聞いた。

「ほら、空罐におとうさんと、おかあさんの骨は入れて、毎日持つて来とんなつたでしたい」と大木が聞いた。あ

あ、と私は叫んだ。あの少女が、きぬ子だったのか。

このように、この小説において記憶は、一貫して自分によつてではなく、他者によつて再構成されている。これはつまり、当事者の特権性が徹底的に剥奪されているということだ。繰り返すが、これこそが「原爆ワアシスト」になることを回避する、この小説の方法なのだ。

他者の言葉によつて自分の記憶が再編成されるということは、当事者の記憶が、非当事者という他者へと開かれていくということでもある。そして他者による、「心の痛み」＝記憶の再編は、これ以降の小説の語りと「私」の意識を、大きく変えていくことになる。

V 「記憶と「痛み」の分有

「空罐」という小説における語りは、「私」が過去と現在において、直接見て、思ったこと、感じたこと、それらから逸脱することはほとんどない。つねに「私」に焦点を当て、「私」を主語に立てて物語は進んでいく。つまり一人称の、しかも禁欲的な当事者の語りなのである。時に「私」は大木やきぬ子の苦悩や痛みにびつたりと寄り添いつつも、他者の経験は「という」、「と言った」、「らしい」というように、その情報が他者によつて語られ、「私」はその語り手にとつての聞き手であったことが明示されているのである。

ただしここで、きぬ子の背に埋まつているガラスの痛みについての描写にふれておかなければならないだろう。「(前略) ガラス片の痛みを知ったのは、体育の授業中である。活発なきぬ子は、四十歳を過ぎていながら、子供たちに前転

をみせていた。丸めた背中が、マットの上に落ちた時である。明滅するイルミネーションのような、軽やかな痛みが、背中に起きた」。このきぬ子に寄り添った極めて感覚的な描写は、禁欲的な語りからは逸脱しているかのように見える。しかしその後、「と大木が説明した」というように、最終的には、他の描写と同様、大木という情報提供者が示され、「私」がその聞き手であることがしつかりと明示されるのである。「私」の意識や感覚から逸脱を許さない、これが「空罐」という小説における語りの特徴なのだ。

それは、被爆時においてどこにいたのかという「微妙な差異」が、生死を分けることをおそろしいまでに知っている、被爆者の「私」を主人公とした小説にとって、実にふさわしい語りの選択であろう。「微妙な差異」と、そこから派生する自分の経験とその記憶に拘泥せざるを得ない被爆者の心境を、模倣するかのような語りのありようである。

だがこのような被爆者の心のありようは、あまりに孤独であるし¹³、それを模倣する語りはあまりに禁欲的だ。

しかしこの小説は、人々の記憶の揺れを繰り返し描く。そして、「私」の「心の痛みになって残っていた」空罐を持つ少女の記憶が、他者によつて再編成され、記憶の絶対性が改めて揺らいだとき、「私」の心は自分の記憶のみに拘泥することをやめる。「私」に寄り添う当事者的な語りも、今までの禁欲的なものから大きく逸脱する。「私」の記憶の外部へと一歩踏み出すのである。

¹³ この孤独を描いたのが、前述の井上ひさし『父と暮らせば』である。主人公はほんのわずかな立ち位置の違いで自分が生き残ってしまったことに深い罪悪感を覚え、その主人公の孤独から、原爆で死んだ父があの世界から甦ってくるのである。

焼けた家の跡に立って、白い灰の底から父と母の骨を拾う、幼いきぬ子の、うつむいた姿が、薄暗い教室の中に浮かびあがった。あの空罐は、いま何処にあるのだろう。

「私」は当然のことながら、少女であつたきぬ子が両親の骨を拾っている姿を見てはいないし、きぬ子もそのような話を、「私」に話したことはなかった。にもかかわらず、被爆後三十年以上経つたこの教室で「私」はそのきぬ子の姿を幻視するのである。他者によつて自分の記憶を再編成された「私」は、他者の被爆経験という「入つてはいけない領域」に足を踏み入れたのだ。岡真理のいう「〈出来事〉の記憶の分有」化¹⁴がここで生じているのである。

そうなったとき「私」は、ここにはいないきぬ子の現在に思いをはせることになる。

きぬ子は、まだ、赤さびた空罐に両親の骨を入れて、独り住いの部屋の机に、おいているのだろうか。

昨年、K寺で逢つたときにも、きぬ子は両親の話には触れなかった。現在の生活も、過去の生活も、いつさいを口にしなかった。あの頃、背中のガラスは、既に痛みはじめていたのかもしれない。

「私」はここに至つて「現在の生活も、過去の生活も、いつさいを口に」せず、沈黙するきぬ子の「痛み」に思いを馳せるようになる。「背中のガラスは、既に痛みはじめていたのかもしれない」と、他者の「痛み」に思いをめぐらすようになるのである。記憶の分有化は「痛み」の分有化でもあるのだ。

¹⁴ 岡前掲書 p.xvi

VI 「あした」へと流れ出す時間

この経験は、「私」に新たな「痛み」を負わせただけではない。きぬ子の「背中のガラス」に思いをめぐらすことは、小説冒頭に置かれているもうひとつのガラスと対比したとき、また違った姿を見せることになるのである¹⁵。

小説の冒頭近く、「私」は、母校の校舎の窓にガラスが入っていることを「奇妙に」感じる。それは「昭和二十年の八月九日の、原爆投下後から卒業するまでの二年間、この校舎には窓ガラスが一枚もなかった」からである。この「奇妙」な感覚は、単に自分の記憶と現状との不一致からくる違和感、といった以上の意味をこの小説の中では持たされている。離島に赴任すると原爆病院から離れることになることを心配する大木に対して、西田は、「むごいことを言うようだけれど」とことわりつつも、原爆が投下された「八月九日」という「同じ場所に踏みとどまっている訳にはいかないのだ」と言う。それはひとり、大木のみが抱える問題なのではない。「うちたちは原爆にこだわりすぎるとやろうか」と大木が「ひっそりと」いうように、「うちたち」被爆者がそれぞれに抱える思いなのだ。「私」がガラスのはまった現在の校舎に違和感を覚えるのは、原爆が落とされたあの「八月九日」にしばられ、「同じ場所に踏みとどまっている」からなのであり、「私」の時は、被爆の瞬間から止まったままなのである。

しかしこの小説で明らかになってくるのは、三十年前の記憶の曖昧さである。自分は三十年前に「踏みとどまって」いるつもりでも、時は流れ、記憶は変化してしまっているのだ。自分を縛っているはずの記憶を他者によって補正され、

¹⁵ この「空罐」が、「ギヤマン ビードロ」という連作の一篇であることを思い出さなくてはならない。この小説の中で、ギヤマン、ビードロ、すなわちガラスは、特別な役割を担わされているのである。

さらに三十年前の空罐の「あの少女」が、現在のきぬ子に接続されたとき、「私」の時間は、「八月九日」という過去から現在へと流れ出す。「あの空罐は、いまどこにあるのだろう」と、「いま」に焦点が当てられるのだ。

そしてこの小説は、次のようにして閉じられることになる。

きぬ子は、あした入院するという。きぬ子の背中から、三十年前のガラス片は、何個でてくるだろう。光の中に取り出された白い脂肪のぬめった珠は、どんな光を放つのだろうか。

きぬ子の背中から「あした」取り出されることになる「三十年前のガラス片」は、三十年分の脂肪をまとった「珠」となり、「どんな光を放つのだろうか」と「私」は「あした」の情景に思いを馳せる。過去と現在がつながり、過去は現在へ向かって流れ始め、現在は過去「三十年」の重みをまとった「珠」となつて、「あした」という未来の中で「光を放つ」。

だから、

ああ、と私は叫んだ。あの少女が、きぬ子だったのか。

この、記憶が再編されたときの「ああ」という「私」の「叫」びは、単なる発見の驚きではない。そうではなく、狭苦しく禁欲的な当事者性からの解放、その歓びの声でもあつたはずなのだ。

他者の言葉によって「私」の記憶が再構成されたとき、「私」は当事者性という壁を突き破って、他者であるきぬ子を幻視し、彼女の「痛み」を分有する。同時にそれは、「私」にとって、過去から現在、そして「あした」へと、一歩踏み出すことでもある。つまり「空罐」とは、そういう物語なのである。

【参考文献】

林京子（聞き手 島村輝）『被爆を生きて 作品と生涯を語る』（岩波ブックレット 二〇一一年）

井上ひさし、小森陽一編『座談会 昭和文学史』五（集英社 二〇〇四年）

渡邊澄子、スリアーノ・マヌエラ『日本の作家 100人 人と文学 林京子』（勉誠出版 二〇〇九年）

深津謙一郎『『八月九日』の亡霊 林京子『ギヤマン ビードロ』論』（『共立女子大学文芸学部紀要』第五七集所収 二〇一一年）

川西政明「林京子小論」（林京子『祭りの場・ギヤマン ビードロ』講談社文芸文庫 一九八八年所収）

柄谷行人・中上健次・川村二郎「第七十四回 創作合評」（『群像』一九八二年二月）

岡真理『記憶／物語』（岩波書店 二〇〇〇年）

ここの史代『夕風の街 桜の国』（双葉社 二〇〇四年）

井上ひさし『父と暮らせば』（新潮文庫 二〇〇一年）

*本論文は、『国語総合 学習指導の研究』（筑摩書房 二〇一三）に執筆した「林京子 空き缶 作品鑑賞」をもとに大幅改稿したものである。また本文は林京子『祭りの場・ギヤマン ビードロ』（講談社文芸文庫 一九八八年）によった。